

第八章 最終実験

闇司祭 「もうそろそろ暴走する頃だと思うのだけど……いつたいいつまでキスしてるのでしら？」

ナース 「ちゅつ、じゅるるつ、れるう……りつて、先生とキスするの気持ちいいんです……唇は、あむつ、こんなにプルプルで……チユツ、唾液も甘くて……んんうつ、ああむつ、ちゅつ、ちゅるるつ」

女医 「んじゅつ、れるるつ！ そう、そうよ……ただのキスなのに気持ち良すぎるのがいけないのよ……！ さつきからおちんぽもずっと勃起が治まらなくて……あツ、またイく……ツ！ 出る、出ちやう……！」

ナース「先生、じゃあ私とつ！ んりゅ、ちゅるるつ、キスしながらつ、イキましよう：
：私もいく、イきますから……んぢゅつ、ぢゅつ！」

女医「はひつ、ひつ、ひくうううううううう……つ！ おちんぽ、いくうううううつ！
んあああんつ！」

ナース「ふああああつ！ 先生の、熱くて、濃くて臭くて……んひつ、さいこうれ
すうううううううううつ！ ひくうううううううつ！ イくううううつ！」

【二人の荒い息遣い】

闇司祭「あははつ！ いい具合じやない！ どう？ 今の気分は？」

女医「そ、そんなの……最高に決まってるじやない……♪ んあつ、またいく♪」

闇司祭 「うふふっ、それはよかつた。でも、いつまでも呆けてちゃダメよ？ まだメインが残ってるんだから」

マリナ 「ツ！」

闇司祭 「逃げようとしても無駄よ？ 三対一でどうにかなると思う？」

マリナ 「卑怯者……」

闇司祭 「それにほら、あなたのおちんぽももうそんなに硬くなってるじやない。もつと気持ちよくなりたいんでしよう？ カウパーだらだらこぼして、本当は期待しているんじやないの？」

マリナ 「ちが……つ！ 私はそんな……あつ」

【闇司祭、マリナの手首をつかむ】

闇司祭 「はい、捕まえた。うふふ、残念ね。さあ、お楽しみの始まりよ」

マリナ 「なにを……あつ、くつ！」

ナース 「尿道口に、器具を挿入……セット完了しました。では、毒液を注入します」

闇司祭 「あつ、待つて。この子には特別、原液を味わわせてあげましょう」

マリナ 「げ、原液！？」

マリナ（今まで相当辛かったのに、原液なんて……）

闇司祭「あはっ、いい表情になつたじやない。でも怖がる必要はないのよ。『毒』なんて

物騒な響きだけど、最高に気持ちよくなれるんだから」

ナース「司祭様。もう注入してもよろしいでしょうか？」

闇司祭「ええ、いいわよ。たっぷり、注いであげて」

マリナ「ちよつ、待つ……んんううううううううツ！？」

闇司祭「やっぱり原液だと反応が段違いね♪ おちんぽが一気にギンギンになつちやつた♪ それに乳首も、こおんなに硬くなつて……指でなぞつたら、どうなつちゃうのかしら？」

マリナ 「やめ、今触らないで……ああああッ！ おんツ、おおおお……！」

闇司祭 「色気のない声♪ まるでケダモノね。でも、嫌いじゃないわ。ピンピンになつた乳首も可愛くて……ふうー……♪」

マリナ 「んあッ！」

マリナ（ダメ、これ……！ 息だけでイっちゃいそう……！ 乳首痛いくらい尖って、苦しい……！）

闇司祭 「そんな顔されたら、ますますいじめたくなっちゃう♪ ぷっくり膨らんだ乳輪なんて、どうかしら？ こうやつて……クリクリクリつ♪」

マリナ 「んふあつ、あくつ……あおおツ」

闇司祭 「まるで鯉みたいにビチビチ跳ねて、おちんぽも今にもイキそなぐらい揺らして
……すばくエツチだわ。チュツ」

マリナ 「んひいいツ！？ ち、乳首、吸わないでっ！」

闇司祭 「ダメよ。だつてこんなにおいしそうなんだもの……チュツ、んぢゅつ、
ちゅうううううううツ！ あむつ、れろれろつ、ああむつ、んふつ……」

ナース 「司祭様。お楽しみの所申し訳ありませんが、二本目投入します」

闇司祭 「ん……ぢゅぱつ。ええ、どんどん追加して。もつとおかしくなるまで」

女医 「どうせだから、私は右の乳首を貸してもらうわ」

闇司祭 「あら。案外乗り気なのね。まあいいけど……はぶつ」

女医 「あむつ。ちゅりゅりゅつ、れろ、れる……んつ、はむつ」

マリナ 「ああおつ、おつ、おほおおおおお……ち、ちくびがあああんつ！」

闇司祭 「膝までガクガク震わせちゃって……そんなに気持ちいいのね♪ じやあもつと楽しませてあげなきや……あむつ」

マリナ 「ちくび、噛むのだめえええ……つ！ ちくび、とれるつ。とれちやううつ。もうむりいっ！」

女医 「大丈夫よ。人間の身体はそんなヤワじやないから」

闇司祭 「お医者さまからのお墨付きもらつちやつた♪ ジャあ、遠慮なく出来るわね……
はふっ、れろれろれろ、んれろつ、んじゅつ、チュツチュツ」

ナース 「三本目、入ります」

マリナ 「も、もういらない……気持ちいいの、つらい……これ以上やつたら、ほんとにお
かしくなつちやう……」

女医 「ふはっ。だから言つてるでしょ？ これには精力を回復させる効果もあるの。だか
ら心配せず、頭バカになるまで気持ちよくなつていよいよ……あむ、あむ」

マリナ (ダメ……何を言つても、許してもらえない……気持ちよくて、つらくて、でも……)

⋮)

闇司祭 「れろれるる……あら？ 気を失つてゐる？」

ナース 「三本目が入ると同時、落ちました」

女医 「そう。反応がないとつまらないわね。せつかくだから、新しい刺激を与えましようか」

【女医、オナホを持つ】

女医 「注入器を外してくれる？ ……そう、いい子ね、ありがとう。じゃあ、次はこのオナホの中にもたあつぱり原液を塗りこんでえ……あとはこのギンソギンになつたおちんぽ、に……っ」

マリナ 「~~~~ツ！？」

闇司祭 「あ、戻ってきた。氣絶した分の快感を一気に味わってるのね♪
まで出して、アクメのことしか考えてないいい顔になつてきたわ♪」

女医 「戻つてきたところ悪いけど、まだ終わってないわよ？ オナホをこうやって、ぬ
ちゅっ、ぬちゅっ♪ 上下に動かして……」

マリナ 「うあ、ああんっ！ ひぐっ、おうツ！」

闇司祭 「それはなんてダンス？ 自分から腰を振るなんて感心ね」

女医 「ふふ、もう弱い所も全部把握してるから♪ ほうら、ぬ。ふ。ぬ。ふ……ぬ。ふ。ぬ。ふ。ぬ。ふ。ぬ

ぶ……」

マリナ「いああッ！　はひつ、ひんつ、あおおうッ」

闇司祭「やつぱりオナホが好きみたいね。さつきまでとは反応が段違いだわ」

ナース「鼻水まで垂らして無様によがっていますね。みつともない有様です」

闇司祭「それにしても今回は、精液が止まらないトロトロ現象が出ないわねえ……」

ナース「……快樂責めをもつとねちつゝやればそのうち出ると思います」

闇司祭「それもそうね。もつと責めたたら出るかもしれないわ」

女医 「そういうことなら……さあ、次はもつとすごいのをしてあげるわ♪ 私のお口で、この真っ赤に腫れた亀頭を優しく食べてあげる……ああー……んっ」

マリナ 「うひいッ！？ んあおッ、ほつ、ほつ……！」

闇司祭 「口に含まれただけで甘イキしちやつたみたいね。私も見ているだけじゃつまらな
いから……そうね。次はお耳をいじめてあげる」

ナース 「では、私は唇を」

【闇司祭、マリナの耳元へ】

闇司祭 「あらあら……耳まで真っ赤になつて、恥ずかしいのかしら？ 気持ちよくて？」

それとも、どつちも？ ……あむつ。んじゅふつ、れろろ、れるつ、んぢゅぢゅつ、ぢゅ

ぴつ」

マリナ 「あはっ、はああ……あっ、あっ、みみ、あ……」

闇司祭 「あむつ、はぶつ、んむつ……お耳、小さくて可愛らしいわあ。耳たぶもコリコリしてて、美味しい♪ ぶちゅつ、ちゅるるるつ、れろろろろつ」

女医 「亀頭も、果実みたいで食べごたえがあるわ……パンパンに張りつめてて、おつきくで……顎が外れちやいそう……あむつ、はむつ、ああむ、んうう……つ」

マリナ 「ふひや、やんつ！ んんうううう……んむつ！？」

ナース 「んじゅつ、れりゅつ……うるさいお口は、塞いでしまいます……むちゅつ、んんつ、れろろつ、れちゅつ」

マリナ 「ん。ぶあつ、んんうツ！ べろ、入つて……んふあ、ひやああ……れう、れう……」

⋮

ナース 「れろれろ……んちゅつ、れるつ、れるるつ。自分から舌を絡めてきておりますが？」

女医 「腰も振り始めたわね。意識はどうあれ、身体はもうすっかり墮ちきつてるわ」

闇司祭 「じゅるるるるる……んじゅるつ、ぷじゅつ、限界間近つてところね。後ほんの少しのきつかけさえあれば、素直になつてくれるはずよ」

女医 「じやあ、最後の一押しは……任せるわ」

闇司祭 「あら、ありがと。じゃあ、原液を口に含んで、と……んっ」

マリナ 「んむうッ！？ んーつ！ んーつ！」

マリナ（いや、ダメ……流れ込んでくる、飲みたくないのに、美味しい……！）

マリナ 「じゅるつ、じきゅつ、じきゅつ、んぐつ、んふうううう……ぴちゃ、ぴちゃ、く
ちゅつ、ちゅぢゅううううううう……！」

マリナ（美味しくて、気持ちよくて……もう……いくツツツ！）

女医 「んぶつ！？ んぎゅつ、じきゅつ、きゅつ、んぐつ……んぶつ」

ナース 「射精を確認。それにしてもすごい量ですね。今まで一番ではありますか？」

闇司祭 「たぶん原液を飲んだからね。精力も最大限までブーストされているはずよ♪ ふふつ、もうほとんど意識も残っていないのでしょうかね。本能のまま腰を（こ）（こ）動かして、射精のことしか頭にないって顔になっているもの」

女医 「ぐぎゅっ、んぎゅ、んっ、んっ……んええツ！ げほっ、えほっ！」

闇司祭 「あらら。やっぱり全部は飲みきれなかつたみたいね」

ナース 「精液まみれの先生、すぐエッチで素敵です……」

闇司祭 「ふふつ。やっぱりあなたは彼女の相手をした方がよさそうね。あの子は私が可愛がるから、そっちをお願いできるかしら？」

ナース 「はい。先ほど焦られた分、たっぷり可愛がってもらいます」

【ナース、女医の方へ】

闇司祭 「さて、と。後は私たちだけになつたわけだけど、当然責めが緩まるわけじゃないから安心してね」

マリナ 「あっ、お……イツ」

闇司祭 「失神寸前つて感じね。でもまだおちんぽは元気みたいだから、たっぷり楽しんでおきましょう」

闇司祭 「んっ、しょ。ほら、見える。今からあなたのおちんぽを私のおっぱいで包んであげるの。素敵でしよう？ オナホなんか比べ物にならないわよ。ふわふわで、あつたかく

て、やわらかあいおっぱいの虜にしてあげる」

闇司祭 「ほおら……すっぽり♪ おちんちん、おっぱいに食べられちゃったわね♪ このままゆつくり、ずり、ずり……ずりずりっ」

マリナ 「おほっ、ほっ、ほおっ」

闇司祭 「あははっ、唇尖らせて腰引いて、すっぽりく間抜けだわっ。ほらほら、休んでるひまはないわよ？ ギュムッ、ギュムッ……し、し、し……」

マリナ 「あひっ、ヒイツ！ イくツ！ イくうううツ！」

闇司祭 「はい、すべイつちやつたわね♪ うふふっ、ちょおつと歯ごたえがなさすぎじやないかしら？」

マリナ 「うあつ、はひつ、ひつ、おおお……ツ」

闇司祭 「あら、また？ そんなに腰へこへこして、よっぽど射精が気持ちいいのね。おちんぽからビュービュー出すの、そんなに好き？」

マリナ 「ひくつ、ううう……ああツ！ あツ、あツ！」

闇司祭 「うーん……こんなに弱いとイマイチ面白みに欠けるわね。じゃあ、ちょっと趣向を凝らしてみましょーか」

【闇司祭、身体を離して】

闇司祭 「それじゃ、注入器をセットして、と……ふふつ。この際だし、私も原液を入れて

みようかしら♪ せつかくだもの。もつともつと、気持ちよくならないとね……んんつ
♪

闇司祭 「あはっ、あああ……これ、やつぱりたまらないわあっ。尿道の中を毒液が伝つて
いく感じ……背筋がゾクゾクして、おちんぽも疼いちゃう……ツ！」

闇司祭 「はあ、はあ……んんつ。身体、どんどん熱くなつてきてえ……おちんぽ、ちんぽ
も爆発しちゃいそう……♪ 膀胱がバカになつちやいそなこの感覚、病みつきになつ
ちやいそう……つ♪」

闇司祭 「んはっ、ふうっ、うつ……あはああ……もう終わつちやつたあっ。でも、あなた
にはちょうどいいインターバルになつたんじやない？」

マリナ 「はあ、はあ……う、うるさい。そのまま一人でバカやつてればよかつたのよ」

闇司祭 「減らず口が戻ったならもう大丈夫ね♪

じゃあ、ちょっと可愛がつてあげる

わ」

【闇司祭、マリナの正面へと移動】

闇司祭 「兜合わせって、知ってる？ こうやって……んつ。私とあなたのおちんぽを擦り合わせるのっ」

マリナ 「ぐうつ、うう……何よ、これ……ッ！」

マリナ （こいつのおちんぽ、熱くて硬い……それに先走りがつ、ローションみたいになつて……気持ちいい……ッ！）

闇司祭 「あははっ、気に入ってくれたみたいで何よりだわあッ♪ ほら、こうやつてえ⋮⋮ずり、ズリ……ズリズリッ」

マリナ 「んはあッ！ あんううう……！ き、汚いの押しつけないで……ッ！」

闇司祭 「ふふっ、腰を動かしながら言つても説得力ないわよ？ ほらほら、もっと楽しみましょウヨツ♪ おちんぽ擦り合わせるの、気持ちいいでしよう？」

マリナ 「だまりな、さい……ッ！」

闇司祭 「あはッ！ キ、くう……ッ！ 今のちんぽビンタ、すぐよかつたわあ⋮⋮ッ！」

マリナ 「やつぱりあんた、マトモじやないわ……」のマゾッ！」

闇司祭 「んほおおお……ま、また、今度は逆からあ……往復ちんぽビンタ、すごい…
⋮ツ！」

マリナ 「そんなにツ！ 好きならツ！ いくらでもツ！ やつたげるわよツ！ このツ！
変態ちんぽ女ツ！」

闇司祭 「はおツ、ほおおツ！ れ、連続で叩いてくるなんてえツ♪ ちんぽ痛いのにツ、
気持ちいいツ！ あおおおおツ！」

闇司祭 （嗚呼、本当にすゞいわ……！ いい具合に、私もこの子も壊れてきてる…
⋮ツ…）

闇司祭 「もっと、もっとしてえツ！ おちんぽバカになるまで叩いてえツ♪」

マリナ 「言われなくとも……お望みどおり、やってやるわよ……ツ！ とつととイキなさい、このマゾ女ッ！」

闇司祭 「んひっ！ んんぐうううううう……ツ！ い、痛気持ちいい……ツ！ あえええええ……ツ！」

マリナ 「んあツ、アツツ！？ ちんぽ汁かかって、私も……～～～～ツ！」

闇司祭 「ああああああ……しやせえ、とまらないいい……おちんぽバカになっちゃったわああ……つ♪ もおおつ、ちんぽ、ちんぽおおお……ツ！」

マリナ 「はあ、はあ……んつくつ。んああつ、またいく……しやせえ、とまらないい……はふつ、ひああつ」

闇司祭 「ふう、ふう……今の、最高だったわ……案外あなた、Sの素質あるのかもしけないわね。……まあ、本質的にMだから責める時もやりやすいのかも」

マリナ 「うる、さい……あなたよりはマシよ、ドM……」

闇司祭 「ふふっ、ずいぶん口が回るようになつてきたわね。なら、またお胸で挟んであげるわ。さつきみたいにすぐイッたりしないでね？ つまらないから」

マリナ 「……ツ！」

闇司祭 「あら？ 表情が変わったわね。そんなに怖い？ それとも、楽しみで仕方ないのかしら？」

マリナ 「誰が……ッ！ さっさとやればいいでしょ！」

闇司祭 「怖い怖い。でもいつまで強気でいられるかしらね♪」

【闇司祭、マリナの正面へ移動】

闇司祭 「ふふっ、射精したばかりなのにもうおつきくしちやつて。毒液の効果……だけじやないわね。よっぽどパイズリが気に入ったみたい♪」

マリナ 「……ッ」

闇司祭 「あらあら、押し黙っちゃって。我慢してるのが丸わかりよ？ ……まあ、そういうところが可愛いんだけど……ねつ。ほおら、すっぽり♪ どう？ 気分は？」

マリナ 「最低の気分よ……」

闇司祭 「あらそう。でも関係ないわ。あなたがどうだろうが、私には関係ないもの……それじや最初はゆうつつくり虐めてあげるわ……」うやつて、ずりずり……にゅふ、にゅふ……」

マリナ 「んくっ、んんうう……ふう、ふう、ふう……ツ！」

闇司祭 「いいわね、その顔。最高だわ……歯を食いしばって必死に耐えようとしているのね。おちんぽからだらだら先走りこぼしてるけど、健気で可愛いわ♪ ジヤア、徐々に強くしていくわね……」

マリナ 「はっ、ああ……人の身体、好きにして、え……ツ！」

闇司祭 「少し声が震えてきたわね。必死に腰を浮かせて……ほらほら、まだこんなもの
じゃないわよ♪ 頑張りなさい♪」

マリナ 「くはっ、んああッ！ ふぐ、うううう……はあはあはあ……」

闇司祭 「顔真っ赤♪ うふふつ、亀頭もすっかりパンパンになっちゃって……ああむツ

♪

マリナ 「ひあああッ！ そ、ダメエツ！」

闇司祭 「んじゅるつ、じゅるるるるつ！ んふつ、そんなこと言われてやめるわけないで
しょおつ♪ じゅるつ、じゅふふつ、んぢゅううううううう……ツ！」

マリナ 「あああああ……吸うの、いや……はげし……ツ！」

闇司祭 「じゅりゅつ！　ふじゅりゆる……あむつ、はぶつ、あむあむあむ……」

マリナ 「はうつ、はつはつ、先っぽ、あまがみ……いひつ！」

闇司祭 「もう限界？　さっきよりは頑張ったみたいだけど、やつぱり雑魚ちんぱねっ♪
……でも、ダメよ。まだ射精させてあげない」

マリナ 「ふえつ？　あ……どう、して……？」

闇司祭 「クスツ♪　その顔、傑作だわ。もうすっかり射精のことしか頭にないじやない」

マリナ 「な、あ……ン！　この、異常者……ン！」

闇司祭 「クスクス♪ ちゃんとイかせてあげるからそう怒らないの♪」

マリナ 「あっ、くつ！？」

闇司祭 「不意打ちは効くでしょ？ 先っぽにこうやつて……乳首を擦りつけてえ……根元からぐりぐり、ずりずりすればあ……」

マリナ 「くうう、んんうあああああッ！ あつあつあつ！ 出る、せーえき、でちやううう……！」

闇司祭 「じやあ、これでトドメよ。さあ、思う存分イキなさい！」

マリナ 「ツ！ んぐつつつ、あああッ！ 出る……ツ！ 出てるうう……ツ！」

闇司祭 「すごい量ね……もう何発も出しているのに、まだこんなに熱くて、濃い……んふつ、惚れ惚れしちやうわ。とつても素敵なおちんぽねっ♪ 毒液の効果があるとしても、やつぱり魅力的だわ♪」

マリナ 「はああつ、射精、射精、とまらないいい……きもちい、きもちいいよおお……はあはあはあ」

闇司祭 「って、聞いてないわね、この様子じや。一応褒めてるんだけど……まあいいわ。結構キマってるみたいだし、もう一本くらい注入しても問題ないでしょ」

マリナ 「ま、また……？」

闇司祭 「いやかしら？」

マリナ 「……いい、いいの。もっと、入れて……気持ちよくさせて……また、気持ちいいのほしいの……」

闇司祭 「……ふつ、くつ……あははつ！ いいわね、やつと調子が出てきたじやない。お望みどおり、壊れる程愛してあげるわ」

マリナ 「んああ……尿道、擦られるの、すきい……」

闇司祭 「素直になつたみたいで何よりだわ。じやあ、また原液を……つと」

マリナ 「ふあああ……尿道のぼつてきてる……膀胱たまつてるう……」

闇司祭 「あはつ、もうすっかり癖になつてるみたいね。おちんぽを尻尾みたいにぶんぶん振つて、可愛いわ」

マリナ 「だつてえ、これ、いいのぉ……おちんちん、もつとしてえ」

闇司祭 「うふふっ、いいわよっ。じゃあ、お望み通り……ジユプジユプジユプツ♪」

マリナ 「んひあああああ……ッ！ 尿道擦られるの、いひいいい……あえええええつ」

闇司祭 「涙も鼻水も垂れ流しの仰け反りアクメ♪ 素敵だわ」

マリナ 「ひいひいひい……んあッ」

闇司祭 「注入器を抜いただけでまたイったの？ 堪え性のないおちんぽねえ……でもそう

いうところも含めて好きよ……ちゅっ」

マリナ 「ちゅう、んちゅう、れろろつ、れろれろつ、キス……んつ、れるるつ……んふつ、
ぶあつ……もつとお……んじゅるるつ、ちゅぢゅつ！」

闇司祭 「ちゅうちゅう……もう毒液のせいで頭おバカになっちゃってるのね……んふつ、
ちゅるつ、んれろろつ、んはつ……れろおつ」

マリナ 「んじゅるつ、じゅるるつ、れるつ……んつ、いいわよ……もつと、忘れさせてあげ
射精のことしか……ちゅふつ、考えたくないのお……ああむ」

闇司祭 「むちゅう、じゅるるつ、れるつ……んつ、いいわよ……もつと、忘れさせてあげ
る……んふあつ」

【闇司祭、マリナの正面に移動】

闇司祭 「ほら、おちんぱシコシコしてあげるわ……オナホなんかじやなくて、私の手で」

マリナ 「あっ、あっ……それ、好き……して、早くおちんちんゴシゴシして……」

闇司祭 「焦らないでもやつてあげるわ……ほら、シコシコ、ゴシゴシ……亀頭もゆうつく
り指でいじつてえ……」

マリナ 「んああっ、ひくっ、おちんちん、気持ちいい……手コキ、いいのお……」

闇司祭 「少しずつ、握る強さも変えてあげる……」「やつて、ぎゅむぎゅむつ♪」

マリナ 「んあっ、あっ、あああっ！　おちんちん、つぶれちゃうっ、つぶされちゃ

うううう……っ！」

闇司祭 「クスクス♪ でも、そうされるのが好きなんでしょ？ ほら、もう精液もこおん
なに漏らして……手がベタベタだわ♪ 龜頭にもお汁をたあっぷり塗つてあげる」

マリナ 「んひああ……っ、んっ、おちんちん、破裂しちゃいそう……っ」

闇司祭 「ふふふっ、まだ終わってないわよ？ ほおら、シコシコ、ゴシゴシ……もう我慢
なんてする必要ないのよ？ だから思う存分、好きなだけ、精液出しなさい……」

マリナ 「え、ええ……そうよ、もう我慢なんてできないっ、したくないい……っ！ だか
ら、らからあ、またイぐのお……せいえき、でるう……っ！ ふああああっ！」

闇司祭 「本当、底なしね……ビュービュー溢れて、まるで噴水みたいだわ♪ イきながら
射精するの、たまらないでしよう？」

マリナ 「ひくっ、んんううああああっ！ イクイクイクうううううううツ！」

闇司祭 「すごいイキっぷり♪ 今までたっぷり我慢していたみたいだから、その反動かしら？ 精液と一緒に知性まで出してるような顔してるけど♪」

マリナ 「らつてえ、しゅごいのお……こんなに気持ちいいの、はじめてえ……しゃせい、

さいこおおお……♪」

闇司祭 「うふふふ、そこまで言つてもらえると光榮だわ♪ ジやあ、つぎはあ……そうね、してばかりもなんだし、被検体ちゃんの口からリクエストを聞かせてもらおうかしら

♪ 何がして欲しいとか、ある？」

マリナ 「……シ、じやあ、アレ、して……かぶと、あわせえ」

闇司祭 「ああ、アレね♪ そう、アレが好きなの♪ ジやあ、リクエスト通りやつてあげるわ……まずは、こうやつてお互いのおちんぽをずり、ずり擦り合わせてえ……ふふつ、皮の裏側に亀頭をもぐりこませると、とおつても気持ちいいでしょお？」

マリナ 「うああっ、ひつ、んくううつ……おちんちん、あつい……やけどしちゃいそう……」

…

闇司祭 「被検体ちゃんのおちんちん、ビクビクして可愛いわあ……♪ ほらほら、あなたも動いて……すりすりすりすりつ♪」

マリナ 「ああっ、あっ、くひうううつ！ 先っぽ擦り合わせるの、すごい……」し、勝手に動いて止まらないのお……んんうつ！ もつと、もつとお、動いてえ……ッ！」

闇司祭 「ええ、いいわよ……ふふふつ、先走り汁ドロドロにして、そんなに気持ちいいの

ね……私も、なんだか火照ってきちゃうわ……♪ 被検体ちゃん、いい反応ばかりしてくれ
れるから嬉しいわ♪」

マリナ 「はひつ、んくうつ、ふうふうふう……つ」

闇司祭 「あら、腰振りに夢中で聞いてないって感じね。じゃあ、次はこうしてあげる、
わっ！」

マリナ 「んひいいいいんつ！？ おちんちん、ぶたれたああああ……つ！」

闇司祭 「あなたが私してくれた事よ？ ほら、もういち、どつ！」

マリナ 「んはああああああソ！ い、いたいいいいいいつ！ きもちいい
のおおおおおつ！」

闇司祭 「やつぱり被検体ちゃんもドMじゃない♪ ほらほら、まだ終わらないわよ？ い

ち、につ♪ いちつ、につ♪」

マリナ 「んひあつ！ ああああつ！ いたきもちいいのおつ！ おちんちん、もげちゃうつ！ 先っぽつ、ジンジンしてつ！ びりびりしてえつ！ んおおおおおつ！」

闇司祭 「クスクス♪ 腰ガクガク震えてきたわね？ ここらで一回、アクメしちゃいなさいっ♪」

マリナ 「んくつ、んんううああああああああああツ！ イくううう……つ！ おちんちん、しゃせえ、とまらないいいいい……つ！ ふああつ、せーえき出すの、きもちいいのおおおおお……つ！」

闇司祭 「んあッ、アッ……っ！ 私も、イッちやう……っ！ 射精しながらおちんちん擦り合わせるの、たまらないわ……♪ もつともうと、射精したいのお……♪」

マリナ 「……ツ、んあッ、しえーえき、どろどろお……っ」

闇司祭 「うふつ♪ すっかり満足しきつてるみたいだけど、まだよ。次はこれ。何かわかる？ いつもと違う、貫通式のオナホよ♪ これをこうして、お互いのおちんぽを入れれば……♪」

マリナ 「ふあッ、ああ……？ なに、これ……？」

闇司祭 「うふふつ、気持ちいいでしょう？ オナホがきゅうきゅう締めつけてきて、おちんちんの先っぽ同士がキスをして♪ このままこうやつてう、けばあ……♪」

マリナ 「あああっ！ こ、これ……やばっ」

闇司祭 「ふうっ、ふっ、今まで感じたことない……気持ちよさでしよう？ 私も、これ：

…好きいっ♪」

マリナ 「す、すごい……おちんちん同士がこすれ合って、オナホでギュツて密着させられてえっ！ お、んうううううッ！」

闇司祭 「被検体ちゃんと私の精液が中でぐちやぐちやに混ぜられているのがわかるでしょう？ ぴっちり密着し合うと、おちんぽの動きとかつ、熱さとか……♪ ゼーンぶ伝わつてくるでしょお……♪」

マリナ 「え、ええ……今までと、全然違う……っ！ あおっ、んひああっ！ ふうふうふう……っ！」

闇司祭 「気に入ってくれたようで何よりだわっ♪ さあ、もっと動いて……一緒に気持ちよくなりましょう……すりすりすりっ♪ バレーベルレーリーっ♪」

マリナ 「ひいひいひい……っ！ おちんぽっ、おちんぽおつ♪ んはああああっ！」

闇司祭 「ああ、被検体ちゃんのおちんぽ、ビクビクしてきて……私も、もう限界っ♪ さあ、一緒にイきましよう……♪」

マリナ 「んっ、ううんっ！ イ、イくっ！ イくからあっ！ はげしくしてっ！ してよおつ！」

闇司祭 「わかってるわよお……えいつ♪」

マリナ 「んんっ、ぐううううううう！ おちんぽの先、つぶれて……ひぐうううううつ！ イ
くっ！ イくイくイつくうううううううううううううつ！」

闇司祭 「あつはあああああああっ！ オナホの中で、精液溢れて……熱くてねばねばで気持
ちいいのおおおおっ♪ 被検体ちゃんのおちんぽ、ビンビン跳ねてっ♪ ん
ふううううううううううううつ♪」

マリナ 「あはっ、あああ……しえーえき、しゃせー……んああっ」

闇司祭 「ふう、ふうふう……あら？ 落ちちゃったみたいね。でもおちんぽはまだ元気に
ビクビク動いているわ……♪ ジやあ、もう少し……」

ナース 「司祭様。お楽しみの所申し訳ありませんが、すでに『ノルマ』は達成しております
す」

闇司祭 「あら？ ……あ、本当だわ。夢中になつていて気づかなかつたけど、もうずいぶん出していたのね。じやあ、とりあえず今日はこれくらいにしておくわ♪ 被検体ちゃん、『苦労様♪ ゆっくり休んでちようだいね』

マリナ 「はひつ、ああん……ひもうと、いもうとお……わたし、やつたあ……ははつ、あはは……」